## 作者

### 芥川龍之介

明治二十五（一八九二）年～昭和二（一九二七）年。小説家。東京市京橋区入船町に新原敏三・フクの長男として生まれる。生後七か月で母が精神病を患ったため、母の実家に当たる本所区小泉町の芥川家に入籍、母の実兄芥川道章・トモを養父母として育った。芥川家は江戸城大奥にお数寄屋坊として仕えた旧家で、江戸情緒の残る下町の環境とともに、伝統的な文人趣味への親和を培った。江東小学校時代から既に江戸文学、明治文学に親しんだ早熟な文学少年であった。明治三十八年、府立第三中学校進学後は、古今東西の文学を濫読する一方、学業でも英語と漢文は抜群、歴史を好み、秀才の名をほしいままにした。四十三年、成績優秀により無試験で第一高等学校文科に入り、続いて大正二年、東京帝国大学英文科に入学。三年、豊島与志雄、菊池寛、久米正雄らとともに第三次「新思潮」を創刊、五年、中心メンバーとなった第四次「新思潮」に発表した「鼻」が夏目漱石の推挙をうけ、文壇へ登場した。同年、卒業、海軍機関学校の英語の嘱託教官となった。大正七年、塚本文と結婚。このころから本格的な作家生活を決意し、翌年に海軍機関学校を辞職、大阪毎日新聞社の社員となる。鋭利な人間観察と構成的、理知的な作風の歴史小説によって、文壇の流行作家となった。十年に上海、南京、北京など四か月間にわたり中国各地を旅行。この旅で健康を害し、心身の不調に悩まされるようになる。これ以後、作風の変化、現代小説への転換が進んだ。大正末年から、身体の変調、相次ぐ身辺のトラブル、時代の変化への不安などに悩まされて神経衰弱が悪化し、創作活動の低調に苦しみながら、人生への絶望感が色濃い晩年の作品群を残し、昭和二年七月二十四日未明、「ぼんやりした不安」の一句を遺書中に残して服毒自殺した。

### 文学活動

文学史的に大正期を代表する作家の一人として、第三次、第四次の「新思潮」同人であったことから〈新思潮派〉、作風から〈新技巧派〉〈新理知主義〉〈新現実主義〉の名で呼ばれる。作家生活は大正五年の文壇登場から昭和二年の自死に至る十余年の期間であるが、初期を含む前期では、歴史に題材を借りて、緻密で理知的な構成により、近代的な人間心理の観察を専らにして、人間性の内奥に潜む本質をえぐり出そうとする歴史小説の試みが見られる。「羅生門」（大四）「鼻」（大五）「芋粥」（大五）「地獄変」（大七）など、古典の説話物語を素材にした〈王朝物〉の作品を中心に、他に「奉教人の死」（大七）「きりしとほろ上人伝」（大八）などの〈切支丹（きりしたん）物〉、「開化の殺人」（大七）「舞踏会」（大九）などの〈江戸物〉、「戯作三昧」（大六）「枯野抄」（大七）などの〈開化物〉と作品は広範囲に及ぶ。また「地獄変」「戯作三昧」などは、芸術的完成に賭ける〈芸術派〉の作品と見ることができる。後期は現代小説が中心になる。既に「蜜柑」（大八）「秋」（大九）などが書かれていたが、大正十年の中国旅行以後、作風に転換が見られ、「保吉の手帳から」（大十二）など身辺に取材した一連の〈保吉物〉が書かれる。自伝的作品「大道寺信輔の半生」（大十四）に続き、「点鬼簿」（大十五）の痛切な自己告白（「僕の母は狂人だった」）がなされた。最晩年の作品には、

人生への絶望、死の予感、狂気への傾斜が著しい。「玄鶴山房」（昭二）「蜃気楼」（昭二）「河童」（昭二）が書かれ、遺稿として「歯車」（昭二）「或阿呆の一生」（昭二）がある。また、芥川の別の優れた一面として「蜘蛛の糸」（大七）「杜子春」（大九）などの児童文学の作品がある。俳人としても一家をなす。

## 作者を解くカギ

芥川龍之介というと、自殺と晩年の作品の影響から、とりわけ眼光だけが異様に鋭い頬のこけた写真の印象から、神経質で陰鬱なイメージでその生涯が見られてしまう。「羅生門」が暗く陰惨な救いのない物語という傾きで論じられてきたのは、この印象が強い先入観となっていたからではないだろうか。実質的なデビュー作とされるこの作品の背景に、吉田弥生という女性との恋愛が家族の反対によって挫折し、人間のエゴイズムの醜さを痛感した個人的事情が指摘されているのも、この暗さを補強するための証拠固めというきらいがある。だが、「今昔物語集」の野趣の発見の一事でも明らかなように、文壇への野心を秘めた青年芥川の荒々しい創作意欲がこの処女作に込められていることを見落としてはなるまい。老婆を蹴倒す下人に因習的な世俗道徳に反逆する若き芥川の姿を読む説（関口安義）はその意味で十分に根拠があるかもしれないし、大杉栄やベルクソン、さらにはリッケルトやランプレヒトなどの同時代思想との相関性は見逃せない。そして多くの外国文学からの影響ばかりでなく、森鷗外や夏目漱石（鷗外にはすでに面会していたが、漱石には「羅生門」執筆後）、北原白秋、木下杢太郎、さらには武者小路実篤や志賀直哉など、同時代を先に進む作家や詩人との作品を通じた影響関係も多々指摘されている。

「羅生門」を男が何者かになる物語と捉えたとき、創作に人生を賭す覚悟を固めた芥川の作家精神の初心に触れうるのではなかろうか。それは、〈新技巧派〉〈新理知主義〉〈新現実主義〉の名で呼ばれ、虚構の彫琢に賭ける芸術至上主義と明敏な近代的知性による人間観察という文学史的記述では覆えない人間としての芥川を知ることに通じるかもしれない。それは読書行為に付随する一つの幻想に過ぎないかもしれないが、好悪が分かれるにせよ、青少年期に一度は作家というプリズムを通した読書体験をしておくことが、今後の書物や諸学・諸芸との付き合いを豊かにする可能性を高めるように思われる。

## 出典

本文は「芥川龍之介全集」第一巻（岩波書店　平七）によった。初出は雑誌「帝国文学」（大四）。署名は柳川隆之介。第一短編集「羅生門」（大六）に、多少訂正を加えて収録。さらに、作品集「新興文芸叢書８・鼻」（大七）に収録する際、末尾の一文を含むかなりの改訂がなされ、以後定稿とされた。「羅生門」は発表された作品では第四作に当たるが、芥川文学の特質を示した実質的なデビュー作であり、作者の愛着の深かった作品である。ただし、同様に「帝国文学」に掲載された「ひよつとこ」（大四）や、さらに習作期の作品に遡ることで見えてくる芥川文学の多面性もあるので、適宜参照したいところである。

**出典との異同**

教科書表記の統一による変更のほか、現代仮名遣いに改めるとともに、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○「思はぬよ。」→「思はぬぞよ。」（教科書一九二・１）〔教育上の配慮〕

## 参考文献

＊教師用

○作品注釈・読解・鑑賞

**「日本近代文学大系38　芥川龍之介集」**吉田精一編　角川書店　昭四十五

**「鑑賞日本現代文学11　芥川龍之介」**海老井英次編　角川書店　昭五十六

○「羅生門」の作品論

**「『羅生門』論」**（「芥川龍之介１　特集羅生門」所収）海老井英次　洋々社　平三

**「『羅生門』を読む」**関口安義　三省堂　平四

**「日本文学研究資料新集19　芥川龍之介」**宮坂覺編　有精堂　平五

＊特に以下が参照すべきものである。

・「媒介としての門　『羅生門』研究」松本修

・「座談会『羅生門』を読む」三谷邦明・田近洵一・関口安義・鈴木醇爾

・「初期芥川竜之介の世界」関口安義

・「『羅生門』の異空間」平岡敏夫

・「下人が強盗になる物語」杉本優

**「芥川龍之介『羅生門』作品論集（近代文学作品論集成４）」**志村有弘編　クレス出版　平十二

**「芥川龍之介作品論集成第１巻　羅生門　今昔物語の世界」**浅野洋編　翰林書房　平十二

**「「羅生門」の誕生」**関口安義　翰林書房　平二十一
**「芥川龍之介『羅生門』　「羅生門」精読―「下人の行方は、誰も知らない」と書く「作者」」**石川巧
「日本文学」平二十八・四
**「「羅生門」の世界と芥川文学（阪大リーブル66）」**清水康次
大阪大学出版会　平三十一

○作家論・作品論

**「芥川龍之介」**吉田精一　三省堂　昭十七
＊「吉田精一著作集」第一巻（桜楓社　昭五十四）にも収録。
**「古典と近代作家――芥川龍之介」**長野嘗一　有朋堂　昭四十二
**「芥川龍之介の世界」**駒尺喜美　法政大学出版局　昭四十七
**「芥川龍之介論」**三好行雄　筑摩書房　昭五十一
＊「三好行雄著作集」第三巻（筑摩書房　平五）にも収録。
**「芥川龍之介研究」**菊地弘他編　明治書院　昭五十六
**「芥川龍之介」**平岡敏夫　大修館書店　昭五十七
**「芥川龍之介と現代」**平岡敏夫　大修館書店　平七
**「芥川龍之介」**関口安義　岩波書店　平七
**「小説の力」**田中実　大修館書店　平八
**「〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ2」**
田中実・須貝千里編　右文書院　平十一
**「芥川龍之介（日本文学研究論文集成33）」**浅野洋編
若草書房　平十一
**「芥川龍之介とその時代」**関口安義　筑摩書房　平十一
**「芥川龍之介を学ぶ人のために」**浅野洋・芹澤光興・三嶋譲編
世界思想社　平十二
**「芥川龍之介（日本の作家100人）」**海老井英次
勉誠出版　平十五
**「芥川龍之介―文学空間」**佐々木雅發　翰林書房　平十五
**「芥川作品の方法―紫檀の机から（近代文学研究叢刊42）」**
奥野久美子　和泉書院　平二十一
**「芥川龍之介―「不安」の諸相と美学イデオロギー」**藤井貴志
笠間書院　平二十二
**「芥川龍之介―生誕120年」**関口安義編　翰林書房　平二十四
**「弱い「内面」の陥穽―芥川龍之介から見た日本近代文学」**
篠崎美生子　翰林書房　平二十九
**「小説とは何か？芥川龍之介を読む（ひつじ研究叢書（文学編）10）」**
小谷瑛輔　ひつじ書房　平二十九
**「芥川龍之介選　英米怪異・幻想譚」**澤西祐典・柴田元幸編訳
岩波書店　平成三十
**「芥川龍之介　家族のことば」**木口直子
春陽堂書店　平成三十一

＊生徒用

⊙**「山椒大夫・高瀬舟」**森鷗外　新潮社　昭四十三
⊙**「夢十夜・文鳥」**夏目漱石　新潮社　昭五十一
**「芥川龍之介必携」**（「別冊國文学」所収）三好行雄編
學燈社　昭五十四
**「芥川龍之介事典」**菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編
明治書院　昭六十　＊増補版　平十三
**「芥川龍之介を読むための研究事典」**（「国文学」所収）

學燈社　昭六十三・五

⊙**「蜘蛛の糸・地獄変」**芥川龍之介　角川書店　平元

**「フォー・ビギナーズ・シリーズ 51　芥川龍之介」**
吉田和明・田島董美　現代書館　平元

**「年表作家読本　芥川龍之介」**鷺只雄編　河出書房新社　平四

**「羅生門　蜘蛛の糸　杜子春外十八篇」**芥川龍之介
文藝春秋　平九

**「芥川龍之介新辞典」**関口安義編　翰林書房　平十五

**「芥川龍之介（日本文学コレクション）」**庄司達也・篠崎美生子編　翰林書房　平十六

**「文豪ナビ芥川龍之介」**新潮社編　新潮社　平十六

**「芥川龍之介の「羅生門」「河童」ほか 6 編（ビギナーズ・クラシックス近代文学編）」**角川書店編　角川書店　平十八

**「芥川龍之介短篇集」**ジェイ・ルービン編／村上春樹序
新潮社　平十九

**「芥川龍之介ハンドブック」**庄司達也編　鼎書房　平二十七

**「芥川龍之介 没後 90 年 不滅の文豪（文藝別冊）」**
河出書房新社編集部　河出書房新社　平二十九

**「教科書と近代文学 ―「羅生門」「山月記」「舞姫」「こころ」の世界」**日本近代文学館編　秀明大学出版会　令三